

# テレビドラマに関する一考察

## ——その1. オルテガと共に——

福本 義人

映像学科

Research & One Examination on “TV Video Drama” Part 1

FUKUMOTO Yoshito

Department of Imaging Art

(Received November 10, 2006 ; Accepted January 9, 2007)

### ① はじめに

1953年（昭和28）、遠くのものが見える機械「無線遠視鏡」と呼ばれたテレビジョン（Tele-vision）は、NHK受信契約件数866、民間放送日本テレビ放送網開局時で3500台、街頭テレビ220台の受像機から始まった。このテレビ本放送の門出は食料もままならない日本にそんな余裕があるのか、また広告放送など時期尚早などと、関係者の誰にも確信のない危なっかしいものだった。しかし、「電気紙芝居」とも呼ばれたこのテレビジョンが、いざ放送が始まるとプロレス・大相撲・プロ野球・クイズ・バラエティ・ドラマ（『私の秘密』『三つの歌』『ジェスチャー』『お笑い三人組』『何でもやりましょう』『日真名氏飛び出す』など）の番組があっという間にお年寄りから子供まで敗戦後の国民＝大衆の心を掴み、「楽しく」「豊かな」「新しい」戦後ライフスタイルの象徴として不動の地位を確保した。

年配の人ならこんな経験をお持ちだろう。いち早くテレビなる機械を買った親戚や知人宅に押しかけ、床の間に鎮座した小さな箱にかけられた緞帳のようなカバーを厳かにめくり上げて見た映りの悪いモノクロ画面のことを。そして、遅ればせながら自分の家にもテレビがやってきた日のことを……。その箱のやや丸みを帯びた画面に映し出されたのは、血湧き肉踊るスポーツであり、面白いクイズやゲームであり、楽しいおしゃべりであり、まだ見たこともない地方の風景や人々の生き様であり、洋画そのもののアメリカ製テレビ映画だった。

それから60余年、テレビはソフト、ハードともめざましい革新を重ねながら現在の多様なメディアへと進化していくのである。

一方、そのおもちゃ箱に群がった人々もまた番組の発展と共に、“大衆”から、“視聴者”へと進化していく。

マイホームに団欒の場としてのお茶の間があった時代、彼ら“大衆”はお茶の間を占拠したテレビジョンの前に至る。（ちなみに、視聴率調査機関であるビデオリサーチ社が設立されたのは、約10年後の1962年である。）彼らはこんなにさまざまな面白いダシモノが公共放送の受信料を除いて、「タダ」で、しかも簡便に見られるシステムに飛びつき、民間放送（広告放送）の基幹である商業主義の大きな担い手となった。彼らは商業主義の恩恵に浮かれながら、知らず知らずのうちにその格好な標的となっていた。

そのことを考える時、筆者はなぜか、1930年に『大衆の反逆』（寺田和夫訳）で言った、オルテガ・イ・ガセーの言葉を思い浮かべてしまう。

“大衆とは、自らを特別な理由によって——いいとも悪いとも——評価しようとせず、自分がくみんなと同じ>だと感ずることに、いっこうに苦痛を覚えず、他人と自分が同一であると感じてかえっていい気持ちになる、そのような人全部である”

“すべての事実は、大衆が社会の最前列に進み出て、以前には少数者だけのものであった楽しみを占拠し、その用具を使い、かれらの楽しみを享受する決意をかためたことを示している。たとえば、それらの場所がもともと群集のためを思いつくられたものでないのは明らかである。それらの場所はごく狭く、群集がいつもそこに氾濫しているからである。（中略）大衆が大衆であることをやめぬまま、少数派にとって代わりつつある”

——楽しみ場所（お茶の間）を占拠したのは、テレビなのか？ それとも、大衆（視聴者）なのか？

## ② テレビドラマの歴史

まずテレビ放送の歴史を、テレビドラマを中心にして簡単に振り返ってみよう。

### ① 本放送が始まった1953年から60年代——

1953年2月1日にNHKが、民間放送である日本テレビ放送網は8月28日に本放送を開始。(免許を得たのは日本テレビの方が早かった)数年遅れで次々と他の民間放送局も開局された。当然エンターテインメントとして映画会社との確執があり、それも理由の一つだった番組不足から米国テレビ映画が導入された。その後、テレビは大衆に後押しされるように体力をつけて行き、テレビドラマも連続テレビ小説、大河ドラマ、社会派ドラマ、国産アニメ、特撮ヒーローものなど後のドラマの基本となる全てのジャンルが開発され、最もテレビらしい大家族ホームドラマも始まる。

(53～60年代のエポックメイキングな出来事として、1958年・VTR録画放送、1960年・カラー放送、1962年・世帯普及率50% (1000万台)、1963年・通信衛星による宇宙中継、1968年・CATV発足、民放U局開始など)

### ② 70年代は——

ニュース報道メディアとして政治事件や社会の激動、変化をよりリアルにスピーディに、センセーショナルに対応する姿勢がその特性となる。機材の小型化、軽便化で、表現方法も多様化された。また番組制作プロダクションが発足。この頃からテレビ視聴者の視聴習慣が能動的から受動的視聴習慣へと変化し始め、大家族ホームドラマでの女性化が「お化け番組」などと呼ばれる高視聴率を稼ぎ、お笑い番組や歌番組、スポ根アニメ、変身ブームなどテレビ全盛期を迎えた。多様な情報と過激な演出が津波のように押し寄せ、その発展の裏にいわゆるテレビっ子の誕生、暴力礼賛、日本語の乱れ、CMによる過度の消費助長など、多くの弊害が社会化した。

(1975年・ENG (Electronic News Gathering) 取材開始。1976年・家庭用ビデオデッキ、1977年・テレビリモコンが登場、1978年・音声多重放送)

### ③ 80年代に入ると——

スペースロマン的アニメブームがヒット、オタクと呼ばれる一握りの人たちがコミュニティを作り、作品について解釈し、二次制作まで始めるようになる。一方で、フィクションに飽いた視聴者はトークやバラエティ、ワイドショーなどのハプニング番組を志向、芸能人のプライバシーを追いかけ、また生の彼らをいじって遊ぶ番組が人気を得た。そのことによって、ブラウン管上のタレントを「友達化」してしまうという奇妙な現象が始まる。視聴者がテレビに映ることを隣家で起きる現実のように

受け入れる平和で、素直で、ノリのいい映像慣れた大衆に変化した。また社会が複合化し、日常生活の自明性がゆらぎ始めた時代の中で、「不良少女ドラマ」が始まり、「トレンディドラマ」が大流行、そのドラマの中に娯楽と同時に教養、情報、生き方までも見出し始めた。その頃には、テレビをたった一人で見る視聴者が40%を越え、その見方はなんとなく見る「漫然視聴」になった。

(1989年のNHK衛星放送開始)

### ④ 90年代は——

不況がテレビ界を直撃、反面、多メディア、多チャンネル化が進展し、政治報道の比重が高まる。生まれながらにテレビを見て育った「テレビ新世代」が、テレビの裏側に精通した「カルト」という熟練の視聴者になる。制作者は彼らに応えるべく、ひねった構成やマニヤックで凝った演出に工夫を凝らすようになる。情念・怪奇ホラー、サスペンスドラマなど刺激的な映像志向はますます強くなっていく。一方で、旧テレビ文化への回帰要望もあり、2時間単発ドラマでは旧態の人情話を過激な手法で見せる殺人ミステリードラマ一色となる。

(1991年・WOWOW本放送、1992年・CS開始、1996年・パーフェクトTV)

### ⑤ 2000年代になると——

コンピュータの2000年問題から始まり、e-Japanと称された国策としてのデジタル化が決定され、BSデジタル放送開始、アフガン戦争、9・11アメリカ同時多発テロ、阪神淡路大地震、W杯サッカー、そして地上波デジタル、パソコン動画、ワンセグ、堀江ライブドアによるニッポン放送、フジテレビ株買占め事件などあり、最早聖域が聖域でなくなっていく。

しかし、テレビドラマは同じように続いている。

## ③ 現在のテレビについてのアンケート

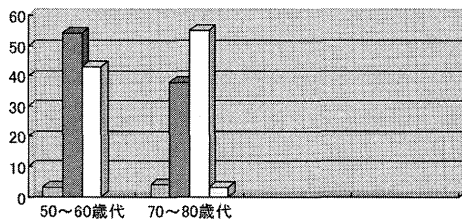
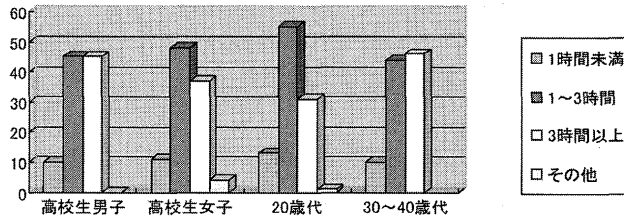
下の図は、2006年6月、筆者のゼミの中で、高校生から年長者まで約750人を対象に、地上波を中心にした《現在のテレビについて》アンケート調査した結果の一部である。

\*12項目の内の6項目を披露し、回答者のコメントをまとめた内容を併記した。

- \*回答者内訳……①高校生男子・110名
- ②高校生女子・385名
- ③大学生 (20歳代)・116名
- ④30～40歳代・26名
- ⑤50～60歳代・60名
- ⑥70～80歳代・52名

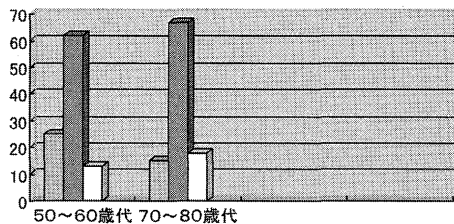
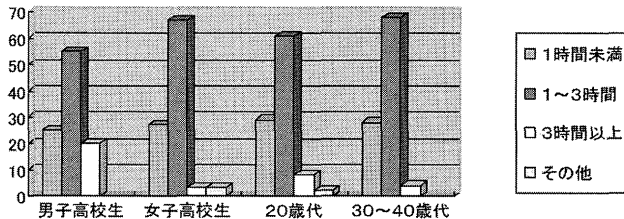
<問・①>『一日何時間テレビをつけていますか?』

——高校生から80歳代まで、1～3時間が半数、3時間以上まで含めると80～90%に及ぶ。若年層は「帰宅したら、とりあえずスイッチを入れる」という。3時間は一日に得られる平均自由時間のほぼ40%。



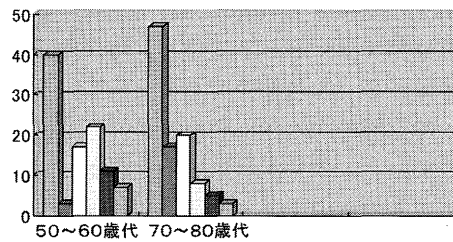
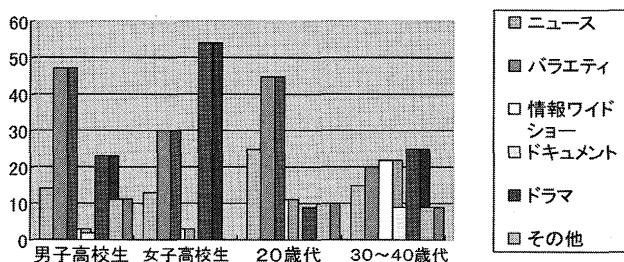
<問・②>『その内、何時間ちゃんと見ていますか?』

——若年層ほど時間の差があり、「ながら視聴」の傾向がある。年配者は自分の意思で見たい番組を見つけている。



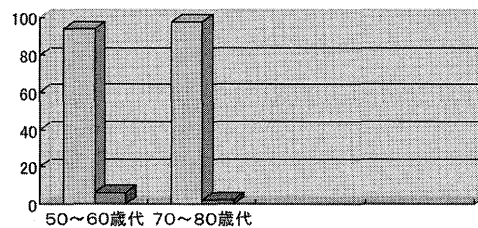
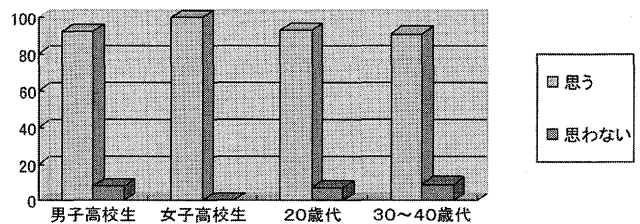
<問・③>『一番よく見る番組のジャンルは何ですか?』

——共通してバラエティ、ニュースに人気が集まり、ドラマの人氣がない。年配者からはドラマに対する厳しい批判が多く見られる。



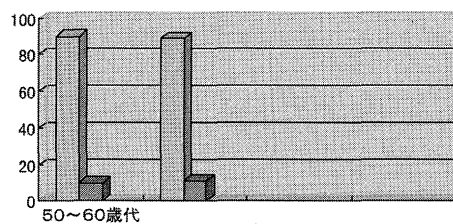
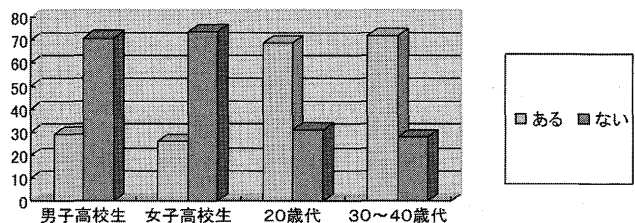
<問・④>『テレビがあってよかったと思うか?』

——若年層にとってのテレビは「あって当たり前」「ないと淋しい」と家具の一部や単なる音声くらいにとらえているのに対して、年配者は過去の思いも含めて「本当によかった」と思っている。



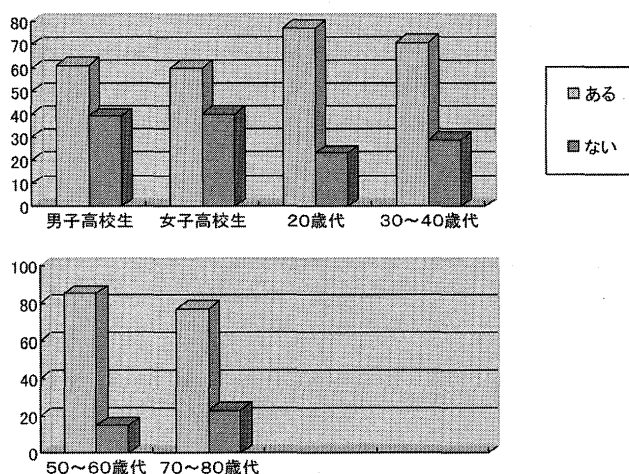
<問・⑤>『現在のテレビにいいことがあるか』

——若年層の多くは、「わからない」「考えたことがない」を含め無関心。年配者になるとその不満は強い。「うるさい、くだらない」「低俗すぎる」「ジャーナリズムに徹せよ」「日本人にとって本当に必要なものを目指せ」などと現番組に対する強い不満のメッセージが発せられている。



<問・⑥>『テレビの未来に可能性はあると思うか?』

——年配者は、問・⑤の結果とは裏腹、日常生活においてテレビの持つ重要性を強く感じ、期待し、叱責するという結果。若年層は、クールな期待感か？その質の深淺は様々だがテレビの役割の大きさ、必要性については回答者の誰もが感じている。テレビが生活の一部として深く浸透し、必要不可欠のものになっているといっても過言ではない。このことは大変重要なことであろう。



#### ④ 連続テレビドラマと単発ドラマ

2006年10月期に放送された連続テレビドラマの新番組ラインアップを見てみよう。

- \* 月曜日『のだめカンタービレ』(CX、主演・上野樹里)
- \* 火曜日『役者魂』(CX、主演・松たか子)『僕の歩く道』(CX、草彅剛)
- \* 水曜日『相棒⑤』(ANB、水谷豊)『14歳の母』(NTV、志田未来)
- \* 木曜日『おみやさん』(ANB、渡瀬恒彦)『だめんず・うぉ〜か〜』(ANB、藤原紀香)『Dr. コトー診療所2006』(CX、吉岡秀隆)『嫌われ松子の一生』(TBS、内山理名)
- \* 金曜日『家族』(ANB、竹野内豊)『逃亡者おりん』(TX、青山倫子)『セーラー服と機関銃』(TBS、長澤まさみ)『アンナさんのおまめ』(ANB、ベッキー)
- \* 土曜日『たったひとつの恋』(NTV、亀梨和也、綾瀬はるか)
- \* 日曜日『鉄板少女アカネ!』(TBS、堀北真希)

——こうして見ると連続ドラマの主役もずいぶん若返ったものである。

上野樹里、志田未来、青山倫子、長澤まさみ、亀梨・

綾瀬はるか、堀北真希と十代のタレントが主役をつとめるドラマが半数を占めている。企画の内容は、マンガ原作・4、映画との共作・2、シリーズもの・4作。

このように連続ドラマにおける低年齢化、シリーズ化の傾向は、近年ずっと見られてきたことであるが、今期の編成は異常なまでに顕著に表れている。この傾向は放送局の戦略として、ドラマ視聴者の二極化を計っている、ということであろう。

「連続ドラマは低年齢者層を視聴対象にし、単発2時間のドラマは高齢者層相手に」という二極化である。

その戦略が放送局、制作者にどんなメリットを与えるのか？

第一に企画の考えやすさ、分かりやすさがあげられる。次に、営業戦略の立てやすさ、タレント行政のしやすさ、制作費の立てやすさ、スタッフの組みやすさなど、すべて「……やすさ」がその基本にある。

筆者の専門分野である演出家についていうと、連続ドラマの演出には若い新人演出家、単発殺人ミステリーの2時間ドラマはベテラン演出家に、ということだ。演出家やスタッフだけではない、シナリオ作家さえも含めたこの二極化の裏には、「丁寧に」「上手に」「普通に」「静かに」などが当然求められない。

一方で、このような問題もある。

制作現場で最重要な役割と決定権を持つ放送局の担当者や制作者たちの多くが、テレビっ子を経たテレビ新世代の若者たちになった、ということである。彼らは、「視聴率を稼ぐため」というのではなく、本人自身が刺激を刺激と感じず、若い視聴者と同じドラマツルギーを当り前のように持っている世代なのである。彼らのやりたい企画が「刺激的な若者企画」になってしまうのも、ごく自然なことなのだ。

そこで筆者は再び、オルテガの言葉を思い出す。

“社会は貴族的であるかぎりにおいて社会であり、それが非貴族化されるだけで社会でなくなるといえるほど、人間社会はその本質からして、いやがおうでもつねに貴族的なのだ”

#### ⑤ 「テレビドラマ」、そのドラマツルギーとは？

1940年、日本最初と言われる『夕餉前』がNHKで実験放送されて、テレビドラマがスタートした。テレビがまだ生放送だった時代、表現者たちにとって映画とのクオリティの差は歴然として、企画内容的にも技術表現的にもやりたいのにできないもどかしさがつきまとった。「テレビなんだから……」とある種の諦めがあり、しか

し、それさえ新しいメディアとしてスピリチュアルなテレビドラマそのものだ、という開き直りもあった。「テレビドラマは報道である」と主張する先達もいた。1958年、『私は貝になりたい』（現TBS）が放送され、テレビドラマのリアリズムを印象づけ、あやしい足取りながら第一歩を踏み出した。

筆者がテレビドラマの世界に入ったのは、30数年前、TBSの30分ドラマ『守ルモ攻メルモ』（2クール26話、脚本・倉本聡、故向田邦子、音楽・故山本直純、演出・故久世光彦、主演・浅丘ルリ子）という作品で、A・D（助監督）見習いだった。当時、まだ番組制作プロダクションは存在せず、全て放送局が制作する、いわば自社制作であった。その頃は、視聴率に左右されることもない時代であり、筆者はそのゆっくりとした制作過程の中で先輩たちから仕事を学ぶことができた。例えば、作家宅に生原稿もらい受けに行き、世間話をさせてもらい、その脚本直しの端っこに立会い、稽古場で役者のリハーサルを目の当たりに見て、時には代役を命じられて芝居の経験をし、演出家とT・D（スイッチャー）、カメラマンとが行うカット割りの方法を盗み、美術さんに生活常識を教えてもらい、スタジオ収録では生本番のような「Q出し」に緊張し、仕上げ後処理作業にも立会い、そういう中でドラマ作りの基本を一つ一つ学んだ。1970年、テレビ番組制作プロダクションができ、放送と制作の分離が始まり、筆者も制作プロに移り、テレビドラマの演出の機会を得て、現在に至っている。

それはさておき、テレビドラマに大きな影響を与えたといえる放送史的な出来事は、まず1960年代、放送されっ放しで消えるのが当然だった生放送からVTR録画放送が可能になったことであろう。録画できることで、描かれる場面（シーン）の種類や内容が広がり、N・Gの場合に撮り直しすることもでき、出演者のスケジュール調整も可能になり、常に最良の作品を目指して大きく表現の幅が広がったのだ。

もう一つの大きな出来事は、1970年から始まった「放送と制作の一部分離」——番組制作プロダクションの発足である。番組作品がパッケージ化され、制作を請け負うプロ集団組織が生まれ、各方面の才能がテレビのもとに集まった。

さらに、70年代後半には、ハンディカメラと小型VTR録画機の開発によって撮影体制のコンパクト化が進み、映画撮影所のVTR仕様スタジオ化を促した。一方で、旧映画マン制作プロダクションによるフィルムでのテレビ作品も人気を博し、「テレフィーチャー」と銘うたれた2時間の単発ドラマ枠が新設され、長期ロケを伴う重厚なドキュメントドラマなども次々と制作された。

「たかがテレビ」と揶揄されたテレビドラマが、その質量共に完全に映画を凌駕したのだ。

しかし、時の表現者たちはテレビのスタジオドラマが持つドラマツルギーを徹底的に検証、実践しないまま、追いかけるように次なる挑戦に飛び込んでいかざるを得なかった。

そして、テレビの前の大衆もまた“視聴者”として、最新流行の目新しい企画、映像、スター、アイドル、ファッションを次から次に見せられ、好むと好まざるに関わらず、より“刺激的な観客”になっていき、瞬時も退屈させないスピード満載の刺激的な映像演出を要求することになる。

近年、商業主義の担い手と祭り上げられ、ターゲットにされた感のある若年者たちを、視聴率主義のテレビメディアも当然のように主役に押し出した。上記したように、2006年10月期の新番組連続ドラマの主人公が10代中心に低年齢化して行き、ドラマの中でその若い主人公たちが自分の生き方や恋愛などを声高に叫んでいる。彼らは、ターゲットである若年視聴者の代表メッセンジャーなのである。

しかし、内田樹が『死と身体』でいったように、“人々が若さだと信じているものは、実は幼さである”のだ。

まさしく、今流行の低年齢ドラマは若者ドラマではなく、幼児退行ドラマである、といっているいい過ぎだろうか？

## ⑥（結論を次の稿にゆだねた）まとめとして

テレビが始まった数年後に、大宅壮一氏は、「一億総白痴化」という言葉でテレビの将来を予言、警告した。「マスメディアは10年以内に消滅してしまう」「テレビ番組はくだらない」「テレビの時代は終わりだ」などといわれ続けてから久しいが、しかし、今現在、消えてはいない。

確かに、エンターテインメントとして次々に新しいメディアが登場する中で、テレビメディアがその中のひとつでしかなくなったことは事実であろう。ドラマもまたしかり、その中のまた小さなひとつである。

とはいいいながら、筆者のアンケート結果でも明確なように、視聴者にとって、テレビは「生活の一部、必需品」になっている。若年層から年配者まで全ての世代でテレビに対する思いは根強く、質の軽重はあるにせよ期待は大きいのである。まして、高年齢化、核家族化が進むこれからの社会では、さまざまな生活場面でデジタル化されたテレビの持つ効用はますます多大になると思われる。

反面、テレビメディアが作り出し発する情報やメッセージが視聴者自身の文化や教育、人間形成の上に、「知ら

ず知らずに、じわじわと、静かに」浸透している。テレビ番組が視聴者に与える影響は最早、いやかなり以前から環境化しており、われわれは「環境問題」を考えなければならないように、当然テレビをも考えなければならない。

テレビをめぐる環境は、テクノロジーの論理、行政の論理、資本・商業主義の論理、制作者の論理に主導されている。業界が「視聴者の声に耳を傾けている」といいながら自前の論理に流れてしまうことは、他の例えば政治の世界においても大いに経験済みのことである。先手を打って決めるのは、常に“あちら側”であり、“こちら側”の声はいつも後手に回る。声は届きにくい。

カナダ・オンタリオ州教育省編の『メディア・リテラシー——マスメディアを読み解く』の中でも、こんなことがいわれている。

『メディアは構成されたものであり、商業的・社会的・政治的な意味を持ち、それぞれの芸術様式を持つ。視聴者がメディアから意味を読み取る』

『これらのコンセプトはどのメディアにも共通するごく当たり前の事実であり、われら視聴者は日々の生活でそれらをほとんど意識することなくメディアと付き合っている』

責任の一端は、視聴者自身にあるのだ。

だとしたら、今ここで視聴者が立ち上がるしかない。視聴者自身が立ち上がってテレビと向き合い、読み解き、考える時期にあると思う。

さて、視聴者はどうやって立ち上がり、向き合っているか？

そのことについては、次回、＜テレビに関する一考察——その2＞の稿で述べたいと思う。

最後に、再びオルテガの言葉を借りて、本稿を終わりたい。

“大衆は、すべての差異、秀抜さ、個人的なもの、資質に恵まれたこと、選ばれた者をすべて圧殺するのである。みんなと違う人、みんなと同じように考えない人は、排除される危険にさらされている。この＜みんな＞が本当の＜みんな＞でないことは明らかである。＜みんな＞とは、本来、大衆と、大衆から離れた特殊な少数派との複雑な統一体であった。いまでは、みんなとは、ただ大衆をさすだけである。

これこそ、外見の粗暴さを隠さずに描いた、われらの時代の恐るべき事実である”

#### 主要参考文献

- 「テレビドラマ史・人と映像」佐怒賀三夫 日本放送出版協会 1978年
- 「最新放送メディア入門」稲田植輝 社会評論社 1998年
- 「メディア・リテラシー——メディアを読み解く」カナダ・オンタリオ州教育省編 FCT 訳 リベルタ出版 1992年
- 「テレビジョン・ポリフォニー」伊藤 守・藤田真文 世界思想社 1999年
- 「大衆の反逆 (La rebellion de las masas)」オルテガ・イ・ガセー 寺田和夫訳 中央公論新社 2002年
- 「テレビはどう見られてきたのか」小林直毅・毛利嘉孝 せりか書房 2003年
- 「テレビ視聴の50年」NHK 放送文化研究所編 2003年
- 「テレビ50年」NHK サービスセンター 2003年
- 「死と身体・コミュニケーションの磁場」内田 樹 医学書院 2004年
- 「誰がテレビをつまらなくしたのか」立元幸治 PHP 新書 2005年